

プロジェクトの成功を祝う会がお開きになったのは、九時を少し回った頃だった。幹事の後輩が「じゃあここで」と声をかけて、みんなぞろぞろと夜の通りへ出ていく。十月の空気が頬に当たって、ビール三杯分の熱が少しだけ引いた。ちょうどいい酔い加減。頭はまだ回っているけど、足元がわずかに軽い。そういう状態。

早く帰るつもりだった。

「速馬さん、ちょっといいですか」

背中に声をかけられて振り返ると、吾大くんが立っていた。

コートも羽織らずに、スマートフォンを片手に持ったまま、こちらを見ている。街灯の下で見る顔は、悔しいくらい整っていた。目鼻立ちがはっきりしていて、酔いの残る同僚たちの中で、彼だけがひとり、妙に醒めて見えた。

「まだ話したいことがあって。付き合ってもらえま

すか」

飲み会はもう終わっている。時間外の話の後輩に付き合う義理はないし、明日でもいい話なら今夜じゃなくていい。

(でも……断ったら、感じが悪いかな……)

先輩として、それはどうなんだろう。

そんな考えが、酔いで少し鈍った頭の中をくるくる回る。吾大くんは急かさない。ただこちらを見ていた。余裕のある立ち方だった。威圧してくるわけでもないのに、その視線に挟まれると、なぜか「帰る」と言い出せない。

「……仕事の話？」

「まあ、それもありますよ。今日中に話しといた方がいいかなって思ったんで」

「……そうだな、少しだけなら」

そう答えると、吾大くんの口の端がわずかに動いた。笑ったのかどうか、わからなかった。

「ありがとうございます。こっちはです」

当然みたいに歩き出す背中を、僕は半歩遅れて追いかけた。

「店はもう決めてあるのか？」

「はい、もうさっき予約しました」

連れていかれたのは、大通りから路地を折れた場所にある、小さな居酒屋だった。外から見ると何の店かもよくわからない。でも引き戸を開けると中は奥行きがあって、カウンターの先にいくつかの個室が並んでいた。

「個室をお願いします」

店員が慣れた様子で「奥の方でよろしいですか」

と確認した。吾大くんは短く頷いただけだった。初日なのに、なぜか常連みたいな顔をしている。一番奥の部屋に案内されて、引き戸が閉まった。その音が、思ったより大きく響いた。四人掛けのテーブル。向かいに座るかと思ったら、吾大くんは迷わず隣に来た。テーブルの角を挟んで、肩が触れそうな距離。

（なんで隣なんだ……。向かいに座ればいいのに…
…）

吾大くんはメニューを開いて、ごく自然な顔でなにかを眺めている。

「お酒、まだ飲めますか」

「あ、うん。まあね……」

「じゃあこれと、これにしましょう」

返事を待たずに、店員に声をかけていた。

料理が来て、話が始まった。業務の流れのこと、前職のこと、部署の雰囲気のこと。吾大くんは聞き

方が上手で、こちらが話し始めると自然に引き出してくる。個室の外から、店内の喧騒が聞こえてくる。誰かの笑い声、食器が鳴る音。

（この子、同期の子たちから、人気あるんだろうな……）

それに、ただ聞いているだけじゃなかった。僕が言葉に詰まると、吾大くんがずっと要点を拾う。言い直す前に「つまりそこが引っかけてるんですね」と整理されて、思わず頷いてしまった。頭が回る。しかもそれを押しつけない。会話の主導権を渡してくれているように見せながら、全部握っている。

そのせいで、気が緩んだ。

（さすが、若手で一番期待されているだけはあるよな……）

そう思った瞬間だった。吾大くんの手が、さりげなく僕の膝のそばに置かれた。